

やはり俺が小学生と青春するのは間違っている。

雨上がりに咲く花

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

捻くれ高校生と純粋な小学生がスポーツで繋がる時、物語の歯車は大きく変わり動き出す…。

※再アップ 設定改変有り

# 目次

第一ゲーム	く	小学生がやって来る	
！ヤア！ヤア！ヤダア…。	く	――	1
第二ゲーム	く	動き出す弄れた歯車	
く	――	――	4
第三ゲーム	く	少女達の覚悟と葛藤	
30	――	――	
第四ゲーム	く	捻くれ少年でも思う、	
小学生は最高だぜ!!	く	――	39
第五ゲーム	く	やはり文化部と運動部	
は交わらないのか	く	――	55
第六ゲーム	く	但し、イケメンでもやって	
はいけない事もある	く	――	62

第七ゲームくろりいちゃんく

75

第八ゲームく先制攻撃く

84



第一ゲーム　　小学生がやって来る！ヤア！ヤア！

ヤダア…。　　)

青春とは、嘘であり悪である。

俺は今までこの理念を疑った事も無ければ間違いとも思つてはいなかった。

少なくとも、あの時まででは…。

遡る事、二週間前。

「比企谷、少しいいか?」

「…何ですか?」

ホームルームも終わり、何時もの様に俺は雪ノ下の罵詈雑言を浴びに奉仕部室へと足を向けていると後ろから声をかけられる。

俺に声を掛けた人物、平塚先生はこちらを向いて手招きし準備室へ来いとジェスチャーで伝えてきた。

少し面倒に感じつつも、担任の言葉だ。ここで逆らえばさらに面倒になるのは目に見える、俺は素直にその背中に着いて行つた。

「いや、突然すまないな、比企谷。」

「いえ、構いませんけど…俺に何の様ですか?」

先生が俺を呼び付ける時は大体愚痴か面倒事が多い。故にこの状況は俺としては大変居た堪れない状況であり、早くこの平塚ダンジョンを抜け出したい一心で問い掛けた。

「まあ、そう身構えるな。今日は…お前に依頼をしたくてきて貰った。」

ほら、やっぱり面倒事だ。俺は心中ため息を漏らしながら話を進める。

「…雪ノ下や由比ヶ浜入れず、俺だけにですか?」

「そうだ、というかこの依頼…お前にしか出来ないからな。」

「ほう…有能な雪ノ下に出来なくて、俺には出来るとは余計に厄介そうですね。」

そうして俺は、事情を聞いた後とある学校の校門前に居た。

そう、俺は慧心学園という進学校の前に居る。しかも初等部。

本気で帰りたい…そう感じながらも俺は平塚先生に頼まれた依頼をこなす為に足を進める。

依頼の内容は、この学校の女バスのコーチをしてくれというものだ。

何でも、この学校は実力主義であるため実力の無い女バスを残しておくより実績のある男バスの為に練習時間を全てくれてやれ、と横暴な事を言われた女バスの顧問である平塚先生の旧友は「実力がないからって練習する場所までとるのはおかしい」と反論し

たらしく、では試合で決着を付けようという話になったとか何とか。

そこで、一応のバスケット経験者である俺にコーチを務めて欲しいという平塚先生の依頼を受け今に至る。

まあ確かに雪ノ下じや小学生に教えるのは難し過ぎるし由比ヶ浜は……と、そうこうしているうちに体育館に到着。

やはり、相手は小学生とはいえ緊張は走る。

というか大丈夫なんだよね？こんな目の怖いやつがいきなり入って通報されないか心配するまでである。

「まあ……悩んでも仕方ねえか……。」

意を決して俺は、その扉を開いた。

「「「お帰りなさいませ!!」主人様!!」」」

俺は勢いよく扉を閉めましたとき。

## 第二ゲーム ㄱ 動き出す弄れた歯車 ㄱ

あれ？何かの間違いかな??俺は確かバスケの練習を見に来たんだよね？何でメイド服来た女の子達が居るの??

俺は何かの間違いだと考え直し、もう一度扉を開く。

「お帰りなさいませ、ご主人様ツ♡」

閉じる

開く

「お、お帰りなさいませご主人様ツ」

閉じる



開く

「何回閉じたり開いたりしてゐるんだよッ!!」

薄い黄色の髪をした少女に俺は文句を言われた……が

「いや、普通バスケの練習見に来てメイドさん居たら慌てるよね?」

「真帆の作戦は失敗……という訳ね」

「うるさいな!?!何で駄目なんだよ……大体の男ならメイドが好きってパパ言ってたのに……ちツ」

「いや普通に考えてびつくりするからね? 体育館入ってメイドさんが居るとか何処のギャルゲーだよ……」

「すみません、真帆ったら張り切っちゃって……」

と、如何にもな委員長長キャラの青髪の女の子が俺に向かって謝罪した。

まあ、子

どもにしては良く気が回った方なのかな？大分空回りしてたけど。

「本当にすみません、名乗りもせずに…あ、私は慧心学園初等部6年生の湊智花と申します！」

しつかりした子も居るんだなと感心を受ける。

「おー、おにいちゃん。ひなは袴田ひなた、宜しくです♪」

次に俺に挨拶してきたのは、何とも小学六年生と言う割には幼い子であったが、この子の笑顔に俺はどうしても戸塚を思い出していた。それくらい可愛いのだ。……タイプとか言う話じゃないよ?!

「あ、あの……香椎愛莉、です……」

俺の前に立ち、おどおどと小さく挨拶する女の子は先程のひなたちゃんと違い逆に、育つところはしつかりと育ち大人っぽい印象を受ける容姿をしていた。強いていえば、純粋な由比ヶ浜。

「私は永塚紗季と申します、以後宜しくお願いしますね。」

先程、俺に謝罪してきた子が礼儀正しく挨拶して来る女の子の後に

「私は三沢真帆！まほかまほまほって呼んで?！」

この子あれだな、何だか由比ヶ浜と同じ匂いがする気がするが……いや、この子の方はもつとやばい気がする。

「了解、そんじやまほまほって呼ぶわ……俺は比企谷八幡、総武高校2年……取り敢えず試合まで宜しく頼むわ」

「宜しく頼むぜ！はっちゃん！」

「宜しくお願いしますね、比企谷さん。」

「おう、よろしくね？おにいちゃんっ♪」

「宜しくお願ひします、えと……比企谷さんはバスケ歴はどれ位なんですか??」

「そだな、小学校の頃に少しと中学だから…4年位か」

「そんな事よりさ！はっちゃんのストライクゾーンってどの辺？妹メイド??それとも妹ア  
ンドロイド!？」

いや、何妹アンドロイドって?その性癖特殊すぎんだろ……。

「だから真帆は落ち着きなさい!」

「あ、あの!早速で申し訳ありませんが、ご指導をお願いしても宜しいでしょうか!?!すみ  
ません、不躰に……」

真帆と紗季が言い合いをしている中、智花が場の流れを変えようと思ったのか早く練習  
がしたいのか、俺にそう告げる。

「あ、ああ……そうだな。取敢ず着替えてきて??」

「ええ?!?!何で?パンツなら心配いらないよ?ほらっ!」  
は、徐ろにスカートを捲り上げ体操着のパンツを見せる。

不満気にそう答えた真帆

「お、おい!」

「皆も履いてるよ? ほらっ!」

そうして真帆は次々にチームメイトのスカートを捲る。いや何なのこの子? 元氣過ぎない?? クレイジーなの??

「おー、ひなもはいてるよ?」

「ひなた、見せちゃ駄目だよ!」

智花が必死に、自らスカートを捲り上げるひなたを止める。自ら俺にパンツを見せて来るとか……この子まほまほと別の意味で大丈夫なのかな……お兄さん心配だわっ!!

「と、取敢ず……マジで着替えて来て」

「わかったよ……それじゃはっちゃん! また後でね」

とまあ、一悶着あったものの取敢ず、ファーストコンタクトは何とか上手く行った様

だ。

「ん〜…妹メイドは失敗かあ。次はどんな作戦で行こうかな!?」

更衣室で、真帆が口を開く。初対面の印象では中々に手強そうな相手を見て次の作戦を考え始める。

「あんたが考えると、ろくにな事にならないから駄目。とにかく、比企谷さんに見込みがあるって思わせないと」

冷静な紗季は顎に手を当て、考えを募らせる。

「ごめんね、皆…元はと言えば私のせいで…。」

「それは違うよ!もっかん、これは戦争なんだから!」 落ち込む智花の肩を叩きながら真帆が言う。

「そうだよ、これはもう皆の問題なんだからさ?一人で考え込まないの。」

「私、足引つ張らない様に頑張る!」

愛莉は気弱な心を振り絞り、小さくガッツポーズを決めている。

「おー、やるぞ〜!」

ひなたもそれに乗る様大きく手を上に上げやる気を表現している  
「ありがとう…皆」

「二」お待たせしました、宜しくお願いします！「三」

「おう、宜しくな。それじゃ取敢ず実力も見たいし、今日は総合練習つて事で。オフエンスを2人、ディフェンスを3人にして役割を交代していく形で。良いか？」

「分かりました」

「ねえ、おふえんす…つて何？」

真帆が手を挙げ、俺に訊ねてくる。

「攻撃の事だよ、ディフェンスは守り」

とすかさず智花がフオローを入れる。

「おお、さすがもっかん！」

「えと……この中でバスケット経験者は湊さんだけか??」

「はー。」

「了解、それじゃわからない所はその都度教えて行くわ……。まずは湊さんとまほまほがオフェンス、残り3人がディフェンスな」

「はっちゃん、皆の事は呼び捨てで良いよ！その方が仲が深まるし！」

真帆の提案に少し考えるが……。まあ、小学生相手なら意識する必要も無いか。

「……そか、了解。そんじゃ始めてくれ。」

「[[[[「はーい！」]]]]」

それぞれ皆がコートに走って行くのを見ながら、俺は一人を呼び止めた。

「えと……あ、愛莉?」



「ひゃ、ひゃい!？」

「ディフェンスの事なんだが、お前背が高いだろ？  
だから、積極的にゴールを……  
？」

その瞬間、智花達が少しざわつく。

え？俺なんか言ったら駄目な事言っちゃった??

「うう……うわああああん!!!」

ええ!?!何かいきなり泣き始めたんですけど、これ誰かに見られてたら完全に誤解されて俺間違いないくpolice manに連れてかれるんですけど!?!

「やっぱりでかいんだ…でか女だ私いつ!!」

あ、マジか……コンプレックスだったのね、それ。

「アイリーン！はっちゃんにちゃんと誕生日教えないから!!」

「そ、そうだよ！愛莉は早熟なだけだよ！」

「おー、あいいり、ていつしゅあるよ?！」

困惑している俺の元に紗季がやって来ると

「愛莉、身長がコンプレックスで…背の事を言われるとあんな感じで」

「あー…成程、それは悪い事したな…」

やはり俺も、小学生に泣かれるのは気分が悪い…というより罪悪感がな。

「すみません、愛莉に四月生まれって知らなくてって言ってもらえますか?！」

え?…何、それ何か関係あるの?…てか…。

「それで大丈夫なのか?マジで…。」

「大丈夫です、その思い込みでずっとやって来ますから」

「マジですか…まあ、仕方ないか」

その後、何とか落ち着きを取り戻した愛莉だったが、その時既に練習時間は終了を迎えていた。皆が掃除を始める中、智花が何気無く落ちていたボールを拾いフリースローを放つ。

「っ…智花!!今のもう一度だけ頼む!」

俺は気付くと、智花に駆け寄りそう言っていた。そして俺は、もう一度見た智花のフリースローにやはり心を踊らせていた。

「ごめんね…私のせいで貴重な練習時間削っちゃって。」

「ううん、気にしないで!勿論、焦っては居るけど…。皆で楽しくバスケット出来なきや意味が無いから」 と何処か神妙な面持ちでそう語る智花。

「よし!はっちゃんの好感度上げるぞ!!」

「私…やっぱり背、高いのかな…」

「うえっ!?!そ、そんな訳ないさ〜!」

「そうよ、その成長したおっぱいが早熟の証明だって!気にしてるとまた揉むよ?」

「ひゃっ!？」

「おー、ひなももむ♪」

とひなたはいつの間にか背後に忍び寄り愛莉の胸を揉む。

「お！私もやるく!!もっかん、紗季 覚悟！」

「ちよ、止め（なさい）てよく!？」

帰宅途中、俺は平塚先生の車で送られていた。

「どうだ比企谷？あの子達は」

「どうこう言われても…愛莉に泣かれてほとんど見られませんでしたし」

「ふふっ、初めはそんなものか…」

「ただ…一人、やっぱり気になる子は居ましたね」

「そう…か」

そう呟いた俺の言葉に対する先生の顔は、何処か嬉しそうに感じた。

本日も授業が終わると、俺は真つ先に立ち上がり教室を出る。

「あ、ヒツキー！一緒に部室行こ？」

背後から声を掛けてきたのは、同じクラスの由比ヶ浜。

「あゝ…悪い、今日は用事があるんだわ。悪いけど雪ノ下にも言つといてくれ」

「ええ〜？またなのヒツキー？最近良く居ないけど…なんか嘘っぽい…。本当はサボリとか!？」

「いや、ねえから」

むしろサボれる物ならサボりたいんですがね…。

俺はそんな由比ヶ浜を軽く流し慧心学園へと向かった。

三回目の練習が有り、この日はパスの練習やシュートの練習をしていた。

俺の教えをすぐに実践しそれを吸収する早さはさすがであり、俺も何処と無く教え甲斐が出て来ていた。そんな時、騒ぎは練習終了間近で起こった。

「(成程な…昨日のシュートといいパスといい、やっぱり智花は経験値が高そうだな。まほまほも無駄が多いが足も早くてジャンプも高い…そして何より疲れ知らずだ。紗季も思い切りの良い動きが出来てるし、状況判断も的確だ…が、問題はあの2人だな。)」

と俺が彼女達の練習を見ていると、智花が近付いて来た。

「あの、比企谷さん。練習メニューを見て欲しくて…」

「ああ、分かった」

俺は智花に差し出された練習メニューを1から見てみる事にした。

「それじゃ、今まではこれでやって来たのか…」

「はい」

「まあ……悪くは無い、けどワンツからのレイアップはまだ早いだろうな」

「はい、分かりました」

「まあでも、基礎だけじゃ確かに詰まらんし…その辺りは考えるか…」

「はい……あっ……!」

顔の距離が近かったのか、照れて離れる智花。これを由比ヶ浜がやればビツチと

罵ってやる所だが…智花なら許せる俺はもはやロリコンなのだろうか? え? 違うよね

?

「あ、練習メニューだ!」

俺が下らない事で頭を埋めていると、真帆が背後から抱き着いて来た。

「おいこら、止めなさい」

「えへへ、良いじゃん〜!」

良くありません、こんな怪しい目をした奴に抱きつくんじゃありません！親御さんが心配するでしょう？!

「ねえねえ、はっちゃん！すつごいので私達を強くしてよ!!? 1時間位でレベル30上がる位の!」

「いや、1時間でレベル30で…学習装置付けて四天王と戦えばそりや行けるだろうが…そりや無理だな」

「え…?」

「お前達の事情は知ってる、確かに横暴な事だし思う所はある、だから俺も出来る限りはしてやるが…昨日今日始めたお前らが成績も残す実力のある男子に勝つなんて、はっきり言つて無謀だ。だから…」

俺がこれからのプランを発表しようとした途端、真帆が声を荒らげた。

「…:…そんなの困るよ!!ねえねえ、何で??ゲームなら一日頑張れば上がるのに??何で??練習すれば勝てるよね!?!」

「だから、このままじゃ無理だつて言ってるだろ?その為に…」

「…はっちゃんの馬鹿!もう良いもん!」

真帆は目に涙を貯めながら走り去って行く。

「あ、おい!…はあ…」

結局その日は解散となり、体育館を離れた俺は憂鬱な気分に堕ちていた。

「たく…人に教えるのがこんなに難しいとはな…まあ、相手が小学生っていうのもあるか…」

久し振りに頭をフル回転させつつ、俺は家路に着いた。

— chat —

智花 「真帆…？」

真帆 「居るよ」

智花 「良かった、先に帰っちゃったから大丈夫かなって思ってた…」

紗季 「そうだよ？みんな心配したんだから！」

真帆 「だって、はっちゃんにはがっかりしたんだもん！」

智花 「でも残念だけど、比企谷さんの言う通りだよ」

紗季 「こうなったら、もっと私達ができるってところを見せないと…」

愛莉 「そうだよね…自信は余り無いけど、頑張らないと」

ひなた 「お…おにいちちゃん…」

紗季 「でも…：…本当なら出来るだけ、好感度を上げときたかったんだけど…」

真帆 「アイリーン！はっちゃんにおっぱい揉ませてやれ!!」

愛莉 「ふええ!!」



紗季 「馬鹿真帆!!」

ひなた 「おく? ひなのおっぱいならいいよ?」

智花 「ひなた、そういう事言っちゃ駄目…」

— chat —

次の日の翌朝、小町と何時もの様に朝食を摂っていると目の前に座るマイラブリーエ  
ンジェルが口を開いた。

「お兄ちゃん…何かあった? 雪ノ下さんか由比ヶ浜さんと??」

「あ? 別に何もねえよ」

「嘘だ、お兄ちゃん。腐り方が増してるもん」

「朝から失礼な妹だ。 ……マジであいつらは関係ねえよ。今回はな」

「そうなの…?」

「ああ、奉仕部絡みじゃねえから安心しろ。ごっそさん」

「それなら良いけど…あ、行つてらっしゃい」

つたく、こいつは変な時に勘が鋭いな…俺は小町にそう告げると、そのまま学校へと  
向かった。そして特に考えても何も思い付かないまま、気付けばその日の学校が終わ  
り部屋に顔を出しても雪ノ下の暴言の相手をする気にはなれなかった。

「比企谷君? 聞いているのかしら?」

「ああ」

「…さつきから鳴き声みたいな返事ばかり…比企ガエル君、貴方は人の話をまともに聞くとこの事が出来ないのかしら？」

「ああ」

読書をする振り…をして、俺はこれからどうするかで頭がいっぱいだった。出来る事なら男バスに勝たせてやりたいが…。

真帆のあの必死さ、あいつらに何があるんだろうか…。

「比企谷君…貴方という人は…！」

「ひ、ヒツキー…大丈夫？ゆきのんが怒ってるよ…??」

「……悪い、帰るわ」

特にここにおいても良い案が思い付かず、俺は家路に着いて歩き始めた。

「あっ……」

帰宅途中、俺が歩いていければ偶然にも目の前から智花がやって来たのだ。

「よう…今帰りか？」

「あ、こんにちは…はい。そうなんです」

「そうか…わ、悪かったな…昨日は」

「あ、いえ！気にしないで下さい。無責任に勝たしてやる…何て言えなかったんですよ

ね」

小学生に同情されるとか、マジでダサイな……俺。

「…そういや、智花は何であそこでバスケットしてるんだ？お前の実力なら、校外チームでも充分通用するだろ?？」

俺はそう聞きながらその近くの河原に腰掛け、疑問を投げ掛ける。俺は前々から疑問だったのだ。こんなに経験値が高く、センスも良い。校外チームでも間違いない。無くエースになれる、大袈裟な話では無い。だから俺は、初心者に混ざっている智花が不思議で仕方なかったのだ。

「…今のチーム以外でのバスケットは、意味無いですから」

「何でそこまで拘るんだ…?」

「私がバスケットを出来るのは、皆のお陰なんです。私は去年の夏まで慧心の生徒じゃなかったんです。私、バスケットの事になると負けず嫌いになってしまっただけで、どうしても勝たないと気が済まなかった。だから毎日必死で練習して、それを皆にも強要したんです。私は孤立しました…当たり前ですよね、勝ち負けに拘って皆の気持ちを考え無かったです。その学校には居られなくなっただけで、転校してもずっと一人で居ました。皆と何を話せば良いか分からなくて…でもある日、竹中君と真帆が喧嘩してて…男女対抗バスケット試合で決着を付ける、みたいな話になったんです。その時に今の担任の先生、美星先生が私にも

参加するように言つて、本気も出して良いよつて言われたんですが……結局いつもの癖で全部一人で引つ掻き回して勝つたんです。でも、また皆に引かれたな……つて思つたら、真帆が褒めてくれて、凄いつて言つてくれて……それでバスケット部を作ろうつて話になつて真帆が幼馴染みの紗季を誘つて、その内愛莉とひなたも入つてくれて……晴れて女子バスケット部になつたんです」

「……成程な」

「私、また嫌な自分が出てくるかもつて思つてたんですけど……でもすつごく楽しくて、皆が教えてくれたんです。楽しくバスケットをする事を。勝ち負けよりも、もつと大切な事があるつて。だから勝ちに拘るとしたら、その大切な場所を無くしたくない、それだけです」

「……もし試合で負けたら、どうするんだ？」

「辞めます、バスケット！もう二度としません……バスケットが無くなつても、皆と居られれば」

「……好きな気持ちに、嘘ついちまうのか?」

智花の言葉を聞く度、俺は胸が締め付けられる思いに悩まされる。

こいつは好きな事より、自分を慕つてくれる連中の側にいる事を選ぶのか……俺には出来なかつた選択を、智花は出来るのか……

「嘘じゃありません、バスケは好き。でも一番大切なのは…五人で居られる場所だから…」

そう笑顔で答える智花は、立ち上がり「話を聞いて貰ってありがとうございます。また…練習は宜しくお願いします」と言つて去つて行つた。

らしく無いかも知れない、俺は智花の話にやはり何故か共感していた。ずっと一人、孤立してぼつちだった。

誰からも嫌われ、ぼつちだと言ひ聞かせても、やはり俺は…きつと智花と真帆達のうな、そんな関係の相手に憧れていたのだ。だから智花の話を聞いた時…胸に来るものがあつた。そして俺は自分の悩みに答えらしいものが何とか出た。…俺の本物はまだ無い。けどせめて、あいつの本物の居場所は守つてやりたい！

俺は携帯電話を取り出し、電話履歴から我が妹を呼び出す。  
「すまん、小町…今日は少し遅くなるわ」

俺は自転車で智花の跡を追い、何処か悲しげに歩く智花の後ろ姿を見つけた。

「智花！」

「へ!?!…八幡…さん?」

「…………辞めんな」

俺は自転車を乗り捨て、智花に近付く。

「へ……？」

「俺がこんなに、何かに熱くなれるとは思って無かった。もつと冷めると思ってたが……けど無理だ、無理なんだよ……俺にはお前を見過ごせないんだよ、智花……」

俺は、もう自分でも何が何だか分からなくなっていた。ただ……口からは言葉が勝手に零れ落ちる。俺は智花の肩に手を掛け、言葉を続ける。

「バスケが出来る場所が、一つしか無えなら……手放したら駄目だ。頼むからあんなに綺麗で……人を惹き付けるシユートが出来るのに、簡単に辞めるなんて言わないでくれ……！」

智花の感情が溢れ出した様に震えながら俺に思いの丈をぶつけてくる

「……簡単なんかじゃないです……私だって本当は……本当は辞めたく無いです……！」

「じゃあ辞めるなっ……！」

「でも……！」

「……守ってやる」

「えっ……？」

「俺が……両方守ってやる、正直俺が人の為に何かに出来るって柄じゃねえ……けど……お前がやっとなんだ本物で居られる場所……俺が守ってやるっ……守らせて欲しい……。そして

見せてくれ、俺が求め続けてきた…本当の友情ってやつを…」

「でも、勝てないって…」

「…まだ勝てないとは言ったが、負けるとも言ってねえだろ」

「っ!!」

「安心しろ、俺が…お前達を勝たせてやる」

自分でも分る。多分俺は…今何か重荷が一つ降りて、今度は心地の良い重さの重荷がまた背中に乗ったのだと。

そのまま俺は、号泣する智花を優しく撫でてやった。

「あつ、平塚先生…あの…」

智花と別れた後、俺は再び学校に戻り平塚先生の元を訪れるとそこにはもう一人学生のような女性が1人居た。

「ん？おお、比企谷か！丁度良かった。こいつが慧心女バスの顧問の筈 美星だ」

「おつ、君が噂のコーチだねえ？ふくん…中々いい顔してるじゃん？」

マジか、この人先生なのかよ…合法ロリってこの人の為にある様な言葉だな。

「あ、どうも…比企谷八幡です。あ、それ関係でその…頼み事があるんですが…」

「頼み事？」

「はい、男バスの資料とか…有りますかね?」

すると2人は顔を見合わせ、クスクスと笑い始めた。

「あ、あの…」

そんなに俺の目が腐ってました? え? 何ですか、その顔は?? あなたは初対面で失礼過ぎませんか?

「ああ! 悪いねえ、実はそろそろ要るんじゃないかなって思って、これを静に渡しに来たんだよん」

そう言つて俺に渡してきたのは、男バスの試合映像が詰まったDVDだった。

…何か、俺掌で踊らされてね? 何これデスノートに行動でも書かれてんの? 不審に思いなながらも、受け取り礼を言っておいた。

「あ、ありがとうございます…」

「比企谷君よ!」

帰ろうとする俺を美星さんが止め、

「…勝算、あるの?」

「…今の所は無いですね、けど…」

「けど?」



「それをひっくり返すのが、勝負の醍醐味かと。」

うわ、俺何臭い事言ってるんだよ…はっずかし！これで負けたら最悪だなおい…。

「アイツめ…良い目をしやがって」

「にやははん、結構ロマンチストじゃない？負け戦をひっくり返すのがロマンとか?！」

「ふふ、私は最初からそう思っていたがな…」

## 第三ゲーム く少女達の覚悟と葛藤く

「……つー訳で、昨日は悪かったな。ろくに説明もせずによ」

翌日、俺は真帆達に頭を下げた。正直許してもらえないかもしれないが……それでも「でも、これだけは聞いてくれ。絶対勝たせてやる、俺は一度受けた仕事はきっちりこなすからな」

と、弄れ混じり照れ隠しに発した言葉にメンバーは自然と頬を緩め

「しょーがないなあ、許してやるか！はっちん!!」

と真帆が蔓延の笑みで俺の手を取る。

「まほまほ……」

俺も自然と頬が緩んだ。こんなにもいい笑顔を俺なんかに向けてくれる、また今までに感じたことのない心地よさを俺はしっかりと感じた。

「私たちも甘かったんです、もっともっと練習しますから!」

「私も頑張ります!!」

「おう、ひなもやるっ!」

「八幡さん、改めてよろしくお願いします」

紗季、愛莉、ひなた、智花の順で俺にそう告げる。

「ああ……改めて宜しく頼むわ」

年下相手だとこんな素直になれるのか……いや、これは智花の話聞いたからか。

智花にはぼっちになって欲しくない、これからもこいつを頼むぞ？お前等……。

心の中でそんな事を思いながら、俺は頷いた。

「それじゃあ、ランニング行ってきまーす」

「おう、後で追い掛けるわ。」

俺はまず、愛莉とひなたの2人に基礎体力を付けて貰う為基本的なランニングを指示し監督役に智花を選び送り出した。

そして

「ねえ、はっちん？この場所からでいいの??」

「ああ、そこで良い。今日から2人にはシュート練習をして貰うぞ。本番まではその位置からだけシュート打つんだ」

「あの、少し遠くないですか？」

紗季が疑問そうに俺に問い掛ける。

「ま、物は試しだ。ほれ？取り敢えず打ってみろ」

「はい……ッ！」

紗季のシュートはゴールには届くものの、やはり入らず……しかし

「ん……OK、OK。いい感じなんじゃねえの？そんなじゃ、次真帆な？」

「りよーかい！見ててよ……う？えいッ!!」

真帆が勢いよくシュートを放つ。

「入れ〜!!」

が、惜しくもそれはゴールリンクに弾かれる。

「距離は2人とも届いてるし、問題ねえよ。後は膝を柔らかくして基本のフォームを思

い出してみ？」

「あ、はい！分かりました」

「お互いに悪い所は指摘しあって教えあって行けばいい、そうすればお互い良くなるか

らよ」

「はいー！」

俺の言葉に素直に頷く2人。今なら少し、平塚先生の生徒に対する思いつてのがわかる気がするな……そんな事を考えながら俺は智花達の跡を追う為体育館を出る。

「ひなたしっかり！」

出るや否や、何とひなたは愛莉の膝の上でぐったりとしていた。

「お、おい!? 大丈夫か!?」

「ごめんなさい、ひなたの体調に気付いてあげられなくて……」

俺も慌ててその側に駆け寄り様子を確認する。これで倒れたら大変だぞ……顔を覗き込み、様子を伺えば

「大丈夫……だよ? おにいちゃん」

そう言つて戸塚並の、いや下手をすれば戸塚以上の輝く笑顔を俺に向けてきた。

「うぐツ!?」

その時だった! 胸の奥からやってくる使命感に、俺は慌ててひなたを抱え立ち上がり口から言葉が飛び出る。

「くっそおお!! 衛生兵!! 衛生兵はどこだ!? 我らが姫が倒れたぞ!? おい、誰か!? メ  
デイイイイイツツク!!!」

俺は冷静になり、目の前に倒れる新たなマイスイートエンジェルを救う方法を片っ端から考え始めた。

そして、出た答えは……

「( )は学校、つまり衛生兵は……保健室!」

決め顔で答えを導き出せば、俺はひなたを背負い全力疾走した。

「おい、ひなた！しっかりしろ!!」

「…にやんにやんにやくん…平気、お兄ちゃんの背中で少し元気になりました」

と甘ったるいほっこりするような声で囁く。

あ、この子は間違いなく天使ですね、はい。うちの小町の座を脅かす奴が現れるとは…!!

「…ん、脱げねえな…」

下駄箱に着き、靴を脱ごうとするも中々しっかり履いてきた様で足だけでは脱げない。

仕方なく背中に乗る俺の新たなマイラプリーエンジェルに降りるように促せば

「だめえく!!」

といきなり耳元で怒られてしまいました。

「あ、いや…靴脱げないんで降りてもらっても?」

「嫌です、ひなはおにいちやんの背中が気に入りましたっ」

満面の笑みで答える天使の回答に俺はあっさり

「ならば仕方ないか…」

「おい、お前…ひなたになにしてんだよ!?!」

と目の前から何やら盗賊Aが現れた。

八幡はどうする？

ひなたを守り戦う　ひなたを守り逃げる

話し合う

名前をまず聞く

と謎の選択肢が俺の頭に浮かんでいると

「おう、たけなかく！ぎゅつ」

ああ、なるほど。こいつが男バスの竹中かって、ちよつとひなたさん？地味にまた抱き着いてくるの辞めてくれませんか？幸せすぎて死にますよ？

「あんたが噂の女バスのコーチか、変な目しやがって。もしかしてひなた達に何かしやうとしたんじゃねえだろうな!」

いや、目は否定しないが……って、こんな目をしてたら誤解も招くか。

「んな訳あるか、ひなたが体調悪そうだったから運んで来たんだよ」

「え？もしかして怪我したのか!」

「おう、してない」

「何だ、良かった……。」

こいつ、さつきからひなたの事は特に心配してるが……まさか？

「ふん！あんたが女バスのコーチだろうが、勝つのは俺達だ!!せいぜい足掻くんだな？だくはっはっは!!」

「……………待てよ」

余裕の表情で立ち去る竹中の後ろ姿に、普段よりも更に低い声を出す。  
その声にさすがの竹中も少し怯んだのか

「……………なんだよ?」

強ばった声色で返してくる。

そんな竹中の目をしつかりと見つめながら、俺は言葉を放った。

「……………靴、脱がせてくれませんか?」

俺は盗賊Aもとい、竹中を退けるとひなたを保健室のベッドへと寝かせる。

「ねえ、おにいちゃん」

「ん?」

「ひな、終わりたくない……………」

「え?」

「もつとみんなと部活したい。でもひな、下手くそで足遅い、シユート届かない……………お願いします、ひなも頑張りますからひなにもバスケ教えてくださいっ」

それは余りにもか細い声から発せられた、確かな少女の意思。



俺が思う以上に、この5人の結束は強い。改めて見せつけられたと同時に責任感もやってくる。

出来ることは全てやり、もつと言えば得体の知れない俺に縋ってでも彼女達はこの場所を失いたくない。

こんな重い依頼は、多分初めてだしこれからも受けることはないだろう。

「……ひなたは、バスケが好きか？」

「おう、みんなとするの楽しいっ」

「……明日からはもつと厳しくなるし、ひなただけを優しくなんてのは出来ないが……それでもやるか？」

「おう、どんと来いっ」

柔らかな笑とは裏腹に、確かな力強さを感じた。

「はあく、練習疲れた〜」

練習終わり、八幡と別れた後皆でドーナツ屋に立ち寄り買い食いをしていた。そんな中、真帆は大きな声を上げる。

「結構みっちりやったもんね」

「私のレベル、はっちゃんが5くらい上がったって！もうにばんどろろのコラッタは屁でもないってさー！」

「私は6だもん。」

と小声で張り合う紗季。

そんな楽しいげな談笑の中、1人の少女だけが浮かない顔をしていた。

「はあ……」

帰り道、愛莉は一人落ち込んでいた。

身長的事もあるが、一人ボールが怖くて逃げてしまう。こんな私がいつまでも足を引く張ってしまっている。いつまでもそれでは駄目なのに、気持ちをコントロール出来ない事にまた溜息を一つ漏らしていた。

## 第四ゲーム　　捻くれ少年でも思う、小学生は最高だ

ぜ!!　　〽

その日の夜、智花はお風呂の中で悩んでいた。

今日はずっと落ち込んでいた愛莉……なにか自分に出来ることは、と。

「愛莉……大丈夫かな」

そんな悩み事をする智花頭の中に、1人のある人の顔が浮かび上がる。

「あっ!!」

お風呂から上がり、携帯を持ち電話帳から一人選ぶ。

「こ、こういう時の為に教えて貰ったんだもの……」

携帯を弄り、コールボタンを押す寸前で一旦思い止まる。

「で、でも……八幡さんがお食事中ならどうしよう、宿題してたら邪魔しちゃうかも……」

どくん、どくと心臓の音が全身に響き渡る。

「でもこれも、チームの為……勝たせてやると言ってくれた八幡さんを私が裏切ること  
は……ああどうしよう!!」

「ふんふんうつて、ん?」

比企谷家では本日も小町が夕食の準備をしていると、兄の携帯から着信音がなるのが聴こえた。

「ええ、お兄ちゃんに電話とか平塚先生かな?」

とトイレに行った兄の許可を取ることもなく平然と携帯を手に取り、ディスプレイを覗く。

そこに表示されていた名は……。

「とつとと……智花って誰?!?」

「ん?んあつ!!小町、勝手に見るなよつ?!」

珍しく慌てて携帯を奪い取る様子を見た小町は

「お兄ちゃん、智花って誰?!ねえ、ねえ?!」

小町が目を輝かせて俺に近付いてきた。

いや、そんな期待した目をすんなよ……。

「いやあく、まさか最近帰りが遅いと思えば……遂にお兄ちゃんにも春が!!」

「うつせえ、つたく……。」

俺は自分の部屋に戻り、智花の電話に対応する。

「もしもし、どうした智花?」

「とっ、ととと……突然夜分遅くにすみません。あの……し、宿題とかしてましたか？」  
緊張して声震えるとか……可愛いなおい。

「いや、特にはしてねえけど……どした？」

「あの……お風呂で少し思いついたんですが、愛莉の事で」

「愛莉の？ああ……」

「やっぱり、今日の事気にしてるみたいで……」

「成程、まあ確かに気にするのは当然か……しかし難しいな、愛莉がセンターなら戦略に幅が出るが……」

「愛莉には申し訳ないですけど……正直、羨ましいです。あれだけ身長があるともっとバスケットで色々出来るのに……」

「まあ、確かにミニバスならスターだな……そいや、あの身長 of の思い込みは何時からだ？」

「私が転校してきた頃にはもう……大きいとか小さいとかいう言葉に敏感でスイカは小玉っていう品種しか食べなくて、好きな食べ物は小豆で嫌いなのが大豆らしくて」

「もはや願掛けだな、それ……仕方ない」

「え？」

「まあ見てろ、俺に考えがある」

何処か得意気に話す八幡に智花は頷くしか無かった。

そして練習日、いつもの様に準備体操を始める愛莉に八幡が声を掛ける。

「愛莉、ちよつといいか？」

「へ？なんですか……？」

「お前、何で背が高いのが嫌なんだ？」

その言葉に皆が慌てた表情を浮かべる。

「は、はっちゃん!?いきなり何言うんだよ!？」

「俺は愛莉に聞いてるんだ、何でだ？愛莉」

俺の真剣な表情と腐った目で恐怖心を煽ってしまったか、愛莉は震えながら口を開いた。

「そ、それは……自分だけ大きくなって、周りから取り残されるといっつか……」

「……確かにお前は大きい、それを気にしてるのかも知れない」

「はっちゃん、もうやめろよ!」

と真帆が声を荒らげてこちらへと近付く。

「日常生活で大きな小学生は確かに注目されるし、そんな大きなお前が試合に出れば間違いなく視線の的だ。」

「比企谷さん、それ以上は……」

紗季も流石に駄目だと感じたのか、涙腺崩壊寸前の愛莉を撫でつつそう告げる。

「けどな、愛莉。試合でその身長を生かしてプレイしてるか、殺して後ろに下がってプレイしてるの見てどちらが見てて気持ちいいと思う?」

「……えっ?」

「お前が身長的事で何か他の奴らに言われるかも知れない。けどその代わりにお前にも得るものがある……なんだと思う?」

「え、えと……それは……」

「……チームの為に貢献した最優秀選手、つまりMVPだ」

「っ!!わ、私が……MVP……」

「お前はこの場所を守りたいんだろ?俺の見た限りでは男バスに特段身長の大きい奴は居ない。だから愛莉が空中を支配できれば間違いない大きいリードだ。つまらない他人の悪口か親友達の喜ぶ賞賛か……お前が聞きたいのはどっちだ?」

「わ、私は……」

「この場所には、お前にしか出来ない……愛莉にしか出来ない居場所がある」

「私にしか出来ない……」

「身長を気にするなどは言わない、だが友達の為にその武器を生かすか殺すか……どち

らにするかはお前が決めろ、愛莉」

「……………」

愛莉は俯き、考え込む。子供相手に少々言い過ぎたか……自身の不器用さに後悔をしていると

「…………私にしかできない事は、私がやります！何を言われても…………皆が喜んでくれたこの場所を守るなら…私にしか出来ない役目、教えて下さい!!」

少女の決意したその瞳に、皆の表情が柔らかく崩れた。

それから試合までの3日間は考え上げた仕上げの特別メニューを行い続けた。誰一人根を上げることなくやり遂げることが出来た。そして、その日の晩。

「よし、沢山食べて明日に備えろよ〜?」

「…………はい!!頂きまーす!!」

英気を養う為、女バスマンバーと俺は美星先生の家へとお邪魔していた。

何と料理を作っていたのは平塚先生だ。いやもうなんでこの人誰も貰ってあげないの?何なの、悪霊の加護でも付いてんの?

「でも、本当にありがとうかな?比企谷君」

「礼なら勝つてからにして下さいよ、俺の仕事はまだ終わってませんから」



「思ったより、責任感が強いんだな」

美星先生は俺を見て嬉しそうに微笑んだ。

「そうか、やっぱ竹中は……」

「はい、もしかしてそこを突こうと？」

「まあな」

夕食の途中、俺は紗季と共にペランダへと出ると明日の打ち合わせを軽く始めていた。

「…比企谷さん、私達は卑怯だとは思いませんよ。そんなに呑気に構えていません」

「当たり前だ、最初から俺も卑怯だとは一つも思わねえよ。突かれる弱点を持つてるのが悪い」

「ふふつ、それもそうですね……なりふり構ってられませんから」

「ああ、その……明日は勝つぞ、絶対」

「おう、もちろん！」

「私にしかできない事……頑張ります!!」

「よっしゃ、はっちゃんの直伝のバスケをみせてやるぜ!!」

「ふふ、そうね！私も負けない!!」

「お前等……」

いつの間にかベランダに出てきていた皆が各々ガッツポーズを決める。

「明日、勝ちましょうね……八幡さん!」

「ふっ……任せとけ」

千葉の夜空に少女達の決意が沓響した。

そして翌日、体育館で並び合う両チーム。

ジャンプボールには智花、相手は竹中だ。

「凄い殺気ですね……」

ベンチで待機していると、男バスのコーチがこちらへやってきた。

「おはようございませす、笹先生。無駄な悪足掻きも今日までですよ?」

うわあ……典型的な嫌味キャラだなこの人。

「小物程良く吠えるんだよな!!」

と俺の目の前では教員2人がガンを飛ばしていた……やだ、私のために争わないで!!  
なんて体育館が言ってるような気がするな、これ。

「湊、今度は負けない……!!」

そして試合開始の笛が鳴り響いた。

ジャンプボールを制した智花から真帆にボールが渡る。

「もっかん！」

真帆からボールを受取れば、智花は一気にドリブルで駆け上がり前方の愛莉へとパスを流す。

「お願い！」

「っ!!」

受け取った愛莉の高さを生かしたレイアツプは、見事に先制点を決めた。

「やったぜ！アイリーン!!」

「凄いわ、愛莉！」

「おう、愛莉すごいっ」

「えへへ…私にしか出来ない事、ちゃんと出来たんだ」

「ただのマグレだ」

男バスのコーチがそう呟き、竹中達が攻め上がってくる。

「一本行くぞ〜！」

「っ!!」

それを見事に智花がカットすれば、そこから愛莉、からのレイアツプでまたゴール。まさに八幡が思い描いた作戦通りの動きを見せていた。

「おお、二連続ゴール！」

「いいペースですね、これで相手はマンツーマンで止められない事が分かったでしょう。愛莉の高さで上を支配出来ればパスも送り放題ですし、万々歳ですよ。」

試合が進み、流石に相手も相手。巧みなパス回しからシュート運びで一点を返す。

しかしこちらには愛莉が居る、やはり上を支配されるのはミニバスでは酷なのである。点差は開き始めた。

「ちっ…タイムアウト!」

堪らず男バスコーチは選手を呼び、新たな作戦を授ける。

「よし、いい調子だな。後は作戦通りに動いてくれりや良い。それで勝ちに行くぞ」

「……はい!!」

(恐らく向こうは、愛莉を潰しに二人掛りで来るだろう…ま、それが正しく俺の作戦なんだが)

試合が再開され、智花が攻め込みパスを愛莉に送ろうとすれば案の定愛莉は二人掛りでマークされていた。

「へっ、香椎を封じればどうってことねえよな…湊」

余裕の表情で智花に話し掛ける竹中、しかし。

(凄い……本当に八幡さんの言う通りだ、なら!)

「真帆!」

空かさず智花は真帆へとパスを繋げる。

「待ち侘びたく!!」

智花からボールを受け取った真帆は、何と見事にシュートを決めて見せたのだ。

「何!?!」

「マークは三沢だ!あのシュート、マグレじゃないぞ!!」

男バスコーチは必死に声を荒らげる、だが

(おうおう、そんなに順調に罠に掛かってくれるとは。貴方達サクラですか?)

男バスが今度は真帆をマークすれば、迷わず智花は紗季へとパスを流す。

「紗季!」

「はいはいっと!」

今度は紗季までもが綺麗にシュートを決めてしまう。

「あがああ……」

男バスコーチはどうやら、開いた口が塞がらない様子だった。

「!!!やったあ!!!」

(この短期間の練習で、ここまでの動きでパスやシュートの正確性向上……こいつら未恐ろしいな、でも全く……小学生は最高だぜ!!)」

「え……？」

「あ、いや……」

いや俺、何口走ってんの？こんな目をした奴がそんな事言ったら間違いなく誤解を生むからねこれ!? あく俺の人生終わったわ……。

「……だよな、あの子達は最高だ!」

美星先生、俺はあなたに付いていきますよ、ええ!!

それでも試合は後半に迫り、やはりスタミナの差が現れ出せば向こうも気合を入れ直しどンドンと攻め上がる。

そして次々と攻めいられ、遂には……

「同点……」

タイムアウトになり、俺は最後の作戦を伝える。

「智花、第二段階だ。パスを回して時間を稼いでくれ、30秒位は貰いに行く覚悟でいい」

「わかりましたっ」

「愛莉は今度は自分のチームのゴール下に移動してくれ、そこでゴールを守る。リバウンドも積極的に取っていい」

「は、はい!」

「まほまほと紗季は智花にパスをなるべく送るようになしてくれ」

「はー」

「おー、おにいちちゃんひなは？」

「ひなたは俺の声を良く聞いておいてくれ、声が聞こえたらあの作戦だ」

「おー、がつてんっ」

「よし、皆……行つてこい！」

「」「はい（はーい）！」「」

段々と追い詰められ、点差は少しずつ開いていく。

そして相手のシュートが外れた瞬間

（私にしかできない事、出来ない事を……!!）

「ええええい!!!」

あの愛莉が積極的にリバウンドを取りに行ったのだ。

「よしっ!! ナイスリバウンドだ、愛莉!! 残り3分、後は……」

そうして俺は、智花の顔を見つめると智花も理解したのか、頷き返してくる。

（ここからはエースの時間だぞ、智花……!!）

頷いた瞬間、智花はまるで本気を今出したと言わんばかりに体を加速させる。そしてレイアップ、囲まれマークに着かれるとそこからのシュートで試合を降り出しに戻した。

「こつちだ、パス！」

竹中にボールが渡る、今だ！と八幡は立ち上がり

「行け、ひなた！竹中にマッチアップしてこい！！」

「お〜」

ひなたは両手を広げ、竹中を封じる。普通に抜けばいいだけの事だが竹中の足はそこで止まる。

「くっ……！！」

意を決して竹中が通り抜ければ、ひなたは大きく尻餅をついた。

「おおお〜……！！」

「え？お、おい！」

「チャージング、青4番！！」

「ええ!!」

「え、今の当たってない…よね？」

美星先生が不思議そうに俺を見つめる。



「ふっ、青春とは嘘であり悪である。ましてや相手を好きになる方が悪い、昔から好意は利用されるのが鉄則ですからね」

「うわっ、つまり竹中のひなたの好意を利用したって事？」

「あいつらも了承済みですよ」

「君は本当に静の言う通りな子だったよ……」

呆れ笑いを浮かべながらも、納得した様子だった。

「っ……よし！」

うわ、あいつももう立ち直りやがった……ちっ、あいつもエースって事か。

そして、そこからは点の奪い合いが続きラスト10秒。

点差は一点。智花が攻め上がろうとするものの、3人でマークに入る。

「くっ……!!」

「俺達の勝ちだな、湊!!」

（私が…私が負けるなんて!!）

智花はそのマークを掻い潜り、大きくジャンプをするとシュートを放った。

「なっ!?!」

しかし、智花の放ったシュートは大きくゴールを外れ……

「くそっ……」

俺は結局、あいつらを勝たせて……

(私が負けるなんて……些細な事、だって今は……皆と一緒にだもん!!)  
「任せろ、もっかん!!」

大きくそれたボールはシュートではなく、真帆へのパスだった。  
それを受け取り、綺麗な放物線を描くシュートを放った…。

# 第五ゲーム　　やはり文化部と運動部は交わらないのか

「……………ふッ」

夏休みに入り、俺は平日の昼間から堂々とリビングのソファで横になっていた。

そして、携帯に写った女バスの皆と行った祝勝会の写真を眺め一人ニヤニヤと頬を崩す……………あれ、俺ただの変態に見えない？今の。

眺めていた祝勝会の写真から急に絵面が変わり、珍しく俺の携帯に着信が入る。俺の携帯に平日の昼間から電話してくるとは、一体どこの暇人だか…気怠い声を出して、早めに電話を切ろう…。

「……………はい？」

『もしもし？比企谷コーチ？私だよ、美星』

俺は勢い良く飛び上がり、ソファで正座の体制と成る。

「おおお、お疲れ様ですっ」

『何でそんなにキョドってるんだよ……………』

「すみません、それで何故俺の番号を？」

『静に聞いた』

『あ、成程……でござ要件は？女バス絡みですか？』

『流石！察しが良くて助かるよ、実はうちの学校で夏休み期間にキャンプするって云う企画があるんだけど……どうせならそれを利用して、キャンプ場の近くにある体育館を使つて合宿にしようかなと思つて校長に交渉してみたよ、OKが出たんだよ。そこで』

『合宿の練習に俺を……ですか』

普段の俺なら、ここは間違いなくNOと答えるが

「構いませんよ、俺も智花達の練習を見れるのは歓迎ですし、あいつらにも会いたいですし」

二つ返事でこれを了承した。

近場の駅で待ち合わせという事だったので、俺は急いで用意を始めた。

と言つても、要るのは着替えと簡単な生活用品だけだ。美星先生は途中でコンビ二に寄つてくれると言つてたので取敢ず下着だけでいいか、等と考え用意していると2階から勢い良くあいつが降りてきた。

「お兄ちゃん、今暇してつて……なにしてるの？」

「ああ、すまん小町。俺は数日くらい家を空ける」

「へっ？お兄ちゃん何処に行くの!？」

何でそんなに驚くんだよ……。

「ちよつと野暮用でな、三日位外泊してくる。」

「ええ……は！それってもしかして、あの智花って人!？」

「……まあ、そういう事だ」

「そつかそつか！なら仕方ないね!!帰ってきたら話聞かせてよ?」

「気が向いたらな」

そして俺は家を離れ、近場の駅で俺の天使達を待つべく待機していた。

「あと5分くらいか……」

「あれ?ヒツキーじゃん、何で居るの!？」

「比企谷君……貴方、用事なのでは無かったの?」

「げっ……雪ノ下に由比ヶ浜」

「人の顔を見るなり、げつとは本当に最低ね??クズ企谷君」

「偶々見たから驚いたんだよ……」

「でも、ヒツキー何でここにいるの?小町ちゃんが待ち合わせには来ないって……」

「は?待ち合わせ??……何の話だ?」

「まさか貴方、正面切って待つのが恥ずかしいからと言って偶然を装って来たのかしら

?……少し気味が悪いわよ」

「そうなの？ヒツキーマジキモイ!!」

うわあ、あらぬ誤解をかけられる上に気味悪がられるとか……俺そんなに悪いことしたの??まあいつもの事だけだ。

「おい！お前ら、はっちゃんをいじめるなよ!!」

「ちよつと、真帆!」

由比ヶ浜と雪ノ下の相手をしていると、向こうからこんな俺を庇う天使達の声が聞こえてきた。

「おお、まほまほに紗季に皆、来たか」

「おおく会いたかった、おにいちゃんつ」

ひなたは俺の顔を見るなり、勢い良く飛び付いてきた。なんて可愛いんだコイツ……最高だな、おい。

「久し振りだなくはっちゃん！夏休みはいつ練習かなって思ってたたら、まさか合宿なんてみーたんも粋なことするよな!」

「久し振り、まほまほ。確かに、俺もお前達と練習できるのは嬉しいし……美星先生まじ感謝だわ。」

「でさ、はっちゃん……このぺちやぱいと頭悪そうな女は何？さつきからはっちゃんの事虐めてたけど……。」

そう言つてまほまほは由比ヶ浜と雪ノ下を睨み付ける、然しその雪ノ下と由比ヶ浜は「比企谷君、この子達は？」

雪ノ下に依頼の事は言わない方がいいか……なら、少し端折つて

「ああ、こいつらは俺がバスケットを教える慧心学園つて所の女バスのチームだよ。で、こっちは俺の同級生の由比ヶ浜と雪ノ下だ。」

「湊 智花です、宜しく御願ひします」

「か……香椎 愛莉、です」

「おく、ひなは袴田ひなたっ」

「永塚 紗季です」

「……三沢 真帆」

露骨に嫌な顔をするなよ、いや子供つて素直すぎて怖いな……。

「そっか、私は由比ヶ浜結衣だよ？宜しくね！」

「私は雪ノ下雪乃よ、貴女達もこの男に変な事をされたらいつでも言いなさい？私がつぐクビにしてあげるから」

雪ノ下のジョークも、こいつらには逆効果だったのか全員が面白くない表情を浮かべた。

「……まあいいや！私たちとはっちゃんを合わせてチーム RO—KYU—BU！ なん

だぜー！」

「ろう……きゅーぶっ？」

あく、それあれですね。祝勝会の時俺が調子に乗って付けたチーム名ですね……てか良く覚えてたな、と云うより採用なのそれ??

「……最近貴方の様子がおかしいと思つたら……しかし比企谷君、どういう事かしら？貴方はいつの間に幼児に手を出す様なクズに成り下がったの？ああ、クズは元々ね」

「おいおい、俺の評価元から低くね？と俺は何時ものようにツツコミを入れようとする  
と……」

「……………んですか」

「え？何かしら……?？」

「……何で……何でそんな酷い事が言えるんですか!!」

突然声を荒らげたのは、なんと愛莉だった。

どうやら、雪ノ下の言葉で完全に子供達の沸点に到達したらしい。

「比企谷さんはそんなクズ呼ばわりされる人ではありません！同級生で同じ部活なのに……なんで、そんな事を……一生懸命、私たちの居場所を守るために戦ってくれたんです、それなのに……あなた達にそんな事言われる筋合いありません！」



「おー！おにいちゃんをいじめる人、ひなはゆるしませんっ!!」

ひなたは俺の体から降りると、両手を広げて俺の前へと立ち塞がり二人を睨みつけた。

雪ノ下は言葉を失い、由比ヶ浜はとても慌てている。

「全く、姉ちゃん大人の癖に人の事を傷つけちゃいけませんって簡単な事も分かんないのかよ！ほんつとムカつく！はっちゃん、こんなババアほつといて行こう!!」

「あ、おいちよっ……」

俺は真帆に手を引かれ、呆然と立ち尽くす雪ノ下に声を掛ける由比ヶ浜の姿を目に移していた。

……この時、俺は不謹慎にも何処か清々しさと嬉しさを感じていた。

第六ゲーム～但し、イケメンでもやっちはいけない事もある～

「全く、何だったんだよ！アイツ!!」

と、真帆は文句を言いながら頬を膨らませる。

俺達は今、雪ノ下達から離れ待ち合わせ場所で美星先生を待っていた。

「すまん、雪ノ下も悪い奴では無いんだが……」

「はっちゃんは悪く無いよ!!悪いのはあのムカつくペチャパイだし!!」

「比企谷さん、私も親しき仲にも礼儀あり……だと思えます」

紗季も真帆に同調するかの様に呟く。いや、恐ろしくその通りなんだがな……

「ま、まあ!あの人の事は今は置いておこう?これからせっかく合宿なんだし……ね?」

皆が俯く中、この重苦しい空気を払い除ける為に口を開いたのは智花だった。

「……だな、皆。とにかく俺の知り合いが不快な思いをさせた事は俺に免じて許してくれ。

だが智花の言う通りこれから合宿だ、せっかく用意してくれた美星先生の為にも全力で

楽しもう……な?」

「はっちゃん……そだね!せっかくのはっちゃんとの練習、楽しまなきゃ勿体無いしね!」

「おく、ひなも楽しむっ！」

「……そう、ですわね」

と、何処か歯切れの悪い愛莉。そんな俺の為に怒ってくれてたのかよ……何か嬉しいのやら何なのやら。

「愛莉、さつきはありがとうな。俺の為にあんなに怒ってくれて……その……正直、あそこまで俺の事を思っただけで庇ってくれたのはお前が初めてだよ。」

俺は愛莉に近付き、肩に手を置きながら告げる。…俺はいつからこんなに素直キヤラになったんだよ、つたく……でもこれも悪くは無い、というより本来ならこれが普通なのだろう。

「ひ、比企谷さん……私はただ、大事な人が傷付けられるのが許せなかつただけですよ……」

「だ、大事なって、んな大袈裟な……まあ、確かに愛莉は俺にとっても大事な女の子だけだよ……」

「へっ!?!」

途端に愛莉の顔は俺を見つめながらみると赤く染まり始める。

「おおお！すっげえ!!はっちゃんがアイリーンに告った!？」

「はっ?!ばっかちげえよ?!?」

何を口走りやがるんだおいまほまほ!？」

「落ち着きなさいよ、真帆!これは急展開だわ…!!」

「おう、おにいちゃん。ひなは?ひなも大事?」

「こんな時までぶれないひなたちゃんマジHMTだわ…。」

「だから、そういうつもりじゃねえって。それに愛莉が迷惑だろ…。」

「わ、私は比企谷さんなら…。」

おい待てええ!?!何故火に油を注ぐの愛莉さん!?!いや、嬉しい。凄い嬉しいけど頬を赤らめながらもじもじして言わないで!?!それを今言ったら…

「な…:比企谷さんがまさか愛莉と相思相愛なんて!?!きやあ!何て展開なのこれ!?!」

「う、ううううう…。」

「おう、智花がしたむいてふるえてるっ」

「おっと!ここでもつかんの機嫌が悪くなってきたぞく!!」

「ち、違うもん!!」

「おーっす、お前達く!!」

と馬鹿騒ぎをしていると美星先生がやって来た。何て良いタイミングで…助かりま

す。

「と、取敢ず行くぞ? ほら」

俺は智花達を促し、美星先生の車へと乗り込んだのだった。

どうも皆さん! こんにちはは私比企谷小町です!

お兄ちゃんが出ていった後、私も急いで雪乃さん達との待ち合わせ場所に来てみると

……

「ゆ、ゆきのん……」

「……大丈夫よ、由比ヶ浜さん。もう平気だから」

えええ!? 何この重苦しい空気!? 何があつたんだろ……。

「皆く! お待たせつて……あれ? 八幡は?」

とそこへやつて来たのはお兄ちゃんが良く話している戸塚先輩。

「あ、すみません。兄なら用事があるみたいで……」

「そうなんだ、残念……つて、君が八幡の妹さん?」

「はい、比企谷小町ですつ!! 宜しくですつ」

そして私達は幾つか会話を交しながら、いつの間にか落ち着いた雪ノ下さん達と共にやつて来た平塚先生の車へと乗り込んだ。

「ね、寝心地はどう…ですか？」

「わ、悪く無い…」

俺達は今、美星先生の車の中なのだが…只今右隣の智花の膝で膝枕されながら、左隣のひなたちゃんやんの膝に足に乗せて横になっている。何故こうなったのか…かれこれ30分前に遡る。

「おく、はいっ。おにいちゃん？あーん？」

「あ、あーん…」

かれこれ30分位はこれが続いている…が、俺の頭の中は先程の雪ノ下の事を考えていた。あの雪の下でも、子供にあんな事言われて平気なのだろうか…確かに俺は雪ノ下の暴言にはもう慣れていて、が確かに第三者の目から見れば気持ちの良いものでは無いかも知れないな。

「あの…八幡さん、大丈夫ですか？お加減が悪いとか？」

右隣に座る智花に声を掛けられ意識が思考を巡らせるのを止める。

「あ、いや…何でもない。少し車に酔ったかもな」

「おく？おにいちゃん車酔い？？」

「え!?!大丈夫ですか!?!それなら横にならないと…えっと、枕…枕…」

「別にそこまでじゃなから気にしなくていいぞ?」

「駄目ですよ!?!お身体に障りますから…えつと、八幡さん…取敢ず、私のひつ…ひつ…」  
と、そこまで言いかけて智花は頬を赤らめる。しかし、頭を上げ軽く左右に振ると俺に向き直り

「私の膝枕にどうぞ!!」

そして今、俺は智花の膝枕で横になつて…じゃねえよ!?

いや確かに、断つたら「私のじゃダメですよね…」とか言われるんだから仕方ないよね? ってそうじゃねえ!! 大問題だろこれ!?! 小学生の女の子の膝枕に寝転ぶとかどんな御褒らつてゲフンゲフン、幸い後ろに座る真帆と紗季、俺に代わり助手席に座る愛莉は眠りについて…が、これはまずいだろ!?

「にやははん!! 比企谷コーチ、愛されてるねえ。コーチのし甲斐があるでしょ?」

「いやまあ…はい」

茶化す様に美星先生がそう言うが…ツツコミを入れる気力も智花の膝枕の効力か吸い取られていく。

「おにいちちゃんのふくらはぎ、もみもみ」

俺これ死ぬる、うん。ごめんな? 戸塚…小町…もうこの魅力から抜け出せそうにないわ…。

「よし、着いたぞ〜?」

「ん…? おお!! 着いたんだ! って…えええ!? もっかん!? 何この状況!」

目的地に辿り着き、前の座席を見れば八幡が智花に膝枕されたまま眠っている。

この後、すっかり女バスの会話は俺が愛莉派なのか智花派なのか、或いは両方狙う二股狙いなのかという会話で盛り上がったのだとさ。

やほ〜! 再び小町です!

私達を乗せた車は目的地へと辿り着き、外に下りてもう一つの班と合流を果たしました。

「おーい!! 優美子、とべっち〜!!」

「おつす、結衣」

「やあ、結衣、戸塚君、雪ノ下さん。えと…そちらの方は?」

「あ、葉山君やつはろー! こっちはヒツキーの妹の小町ちゃん!!」

「どうもですっ」

「そうか、俺は葉山隼人。宜しく」

うわあ、絵に描いたようなイケメンだな…この人。

「あれあれえ? というかヒキタニ君は?? 来てない系??」



「あ、うん…ヒツキーは別け…ええ!？」

結衣先輩は突然驚いた声を上げていた。私もその視線を追い掛けると、そこには…

「しっかし、暑いねえくはっちゃん」

「だな、こんなに暑いと練習プランも色々練らねえと…」

「いつもありがとうございます、比企谷さん。せつかくの夏休みなのに私達に付き合ってもらっちゃって…」

「相変わらずしっかりしてんな、紗季は。でも安心しろよ、俺が来たくてここにきてんだからな」

「比企谷さん…ふふ、そうですね」

「おう、おにいちゃんあめたべる? しおあめだよ??」

「お、ひなたちゃん気が利くな」

何と、あのお兄ちゃんが小学生と楽しそうに話しながら歩いてきたんです。

「ひ、比企谷!？」

思わず声を上げていた葉山さんに気付くと、お兄ちゃんは抜の悪そうな表情を浮かべ

「皆逃げろ!」

と随分とまあ危機迫った顔で告げてその場から退散していた。

キャンプ合宿の挨拶が執り行われる中、葉山は俺に近付いてきた。

「比企谷、彼女達は？」

「俺がバスケットを教える女の子達。平塚先生の古い友人が担任でな、伝手を伝って俺のところまで来たって話だ」

「なるほど、そういう事だったか」

「ああ、今回俺はあの子達と練習合宿をするから…そっちに関わる事は無い」

「……そうか」

葉山が俺から離れた後、小町が猛ダツシユで俺の所へとやって来た。なに？そんなにお兄ちゃんに会いたかったの小町ちゃん??

「お兄ちゃん!?!?どういう事!?!」

小町には何とか葉山と同じ様に説明し、理解して貰ったが…

「後でちゃんと教えてね? あ、智花ちゃんの事もっ♪」

妹による尋問は確定的なものとなりながら、俺は体育館へと足を向けた。

「愛莉! もつと攻めて行け! まほまほは智花をマークしろ!!」

「はい!!」

「ひなたちゃんはパスの受けやすい場所へ! 紗季、良いぞ!! もつと積極的に抜いて行け

!!

「お〜!」

「はい!!」

「そろそろ時間か……よし!そこまで!!一旦休憩!!」

「ふう〜、紅白戦は楽しいねえ〜はっちゃん!!」

「まあ、実践に勝る経験はないからな」

「えへへ、何だか着実にレベルアップしてる気がして凄く楽しいですつ」

「愛莉も大分とセンターに慣れてきたな、このまま慧心の大きな武器になってくれ」

「はいっ!えへへ…」

「へえ〜、こんな所に体育館あんじゃんつて…あれ、ヒキオ?」

と、そろそろと葉山グループ御一行が体育館へと入ってきた。

「おっ、バスケやってる系?楽しそうじゃん!!俺らもやらね?」

「バスケか…良いね、休憩時間はまだあるし」

何勝手に話進めてやがんだよ…アイツ等。

「おい待て、今は女バスの練習時間だ。お前等使用許可は取ったのか?」

「はあ?んな事一々良いじゃんよ、大体半分くらい使っても文句無いっしょ?」

「ここは走り込みなんかも使うから困るんだよ、帰ってくれ」

「おいおい、そりやないっしょーヒキタ二君？いいじゃん別に〜」

勝手だな、おい…こっちは真剣に…

「ま、まあまあ…皆で「遊んだ」方が楽しいだろ？」

「おい!!!」

真帆が限界なのか立ち上がり、葉山に詰め寄る。

「遊びじゃねえんだよ!!私等は真剣にバスケしてんだよ!!」

「はあ?何この糞ガキ、ムカつくんですけど」

「まったく…既に三浦と真帆は臨戦態勢か、まあ最悪…真帆に何かする様なら俺にも考えがあるが。」

「ま、まあ…とにかく、皆でやった方が楽しいだろ?ほら」

と、運動得意な葉山が落ちていたボールをドリブルし始め、一気に駆け出した…が

「っ!!」

気付いた時には葉山の手になっていたボールは葉山の手元には無かった。

「…:…:出て行って下さい、このレベルなら遊びにもなりません」

薄紅色の髪を揺らし、葉山からボールを奪った少女は普段から考えられないくらい低い声を出しつつ葉山を睨み付ける。

「す…:…:凄いいね、君。不意打ちとはいえ凄いいよ」

葉山は少し震えながらも、智花に対してそう告げる。

「……っ！」

智花は葉山の言葉など聞かず、ドリブルで葉山に攻め込む。流石の葉山も2回目はしっかりとディフェンスの構えを取る…が、智花はいとも簡単にドライブで抜き去り華麗なレイアウトを決めて見せた。

「2度は言いませんよ、出て行って下さい…」

「は、はあ？ちよつとバスケ上手いからって調子に乗って…あーし等下手な連中はバスケしちやいけないつて訳？」

「そんな事言つてね「ふざけんじゃねえ!!!」」

気付いた時には、真帆の言葉を遮って叫んでいた。

突然あげた俺の声に三浦だけでなく葉山まで驚いている。

「ざけんじゃねえよ!!」智花達が調子に乗る？何も知らない奴が知った口を聞くな!!この子達は自分達の居場所を自分達の手でやつと守り抜いたんだ!!お前等みたいな友達ごっこやつてる連中が智花達を馬鹿にしている理由は無い!お前等が学校でどんだけふんぞり返ろうが知った事じゃないけどな、智花達にまで偉そうな口を叩ける道理はねえんだよ!出てい来やがれ最低野郎共が!!!」

「…比企谷……………すまない」

葉山は終始驚いた顔を止める事は無く、三浦達を連れて体育館から出ていった。

何してんだよ、何やってんだよ…俺、こんなんじや夏休み明けには虐めの餌食だなかよ…とか言いつつも、俺に後悔は無かった。寧ろ、何処か心は晴れやかな物だ。

「……ばっかみたい」

こちらを見つめる一人の少女には気付かないまま、俺達は練習を再開させたのだつた。

## 第七ゲームく　ろりいちちゃん　く

「はあ　…　どうしたもんかねえ　…　雪ノ下は完全に凹んでるだろうし、トツプカー  
スト組には喧嘩売っちゃもうし　…　」

俺は体育館の外の段差に座り込み、一人考え事に浸っていた。

今朝の出来事から先程の出来事　…　何時もの俺なら上手く回避できてたであろう事  
案も、智花達が絡むと妙に感情的になるのは俺が智花達にそれだけ入れ込んでいるって  
訳で　…　

「ま、それ自体は寧ろ良い事なんだけどな」

「おーい、はっちゃん」

一人で考え事をしていると、後ろから真帆が俺を呼びに来た。

「お昼ご飯出来たよー、早く食べよ??」

「おう、任せっぱなしにして悪かったな」

「何言ってるんの、これくらい任せてよ??あ・な・た♡」

「俺には愛妻が五人も居んのかよ、一気に勝ち組だな」

そんな冗談混じりの会話を交えながら、俺は考え事を一旦やめた。

「おー、おにいちゃんきたー」

「比企谷さん、お待たせしましたっ」

「おにぎりとお味噌汁だけです…」

「いや、助かる。ありがとな?皆」

それぞれが微笑みを浮かべる中、智花だけは浮かない顔をしていた。

「あ、あの…比企谷さん…さつきはその…」

俺はそんな落ち込む智花の頭を優しく撫でやり、優しく微笑みかけ

「気にすんな、皆の為と俺の為に怒ってくれたんだろ??俺は嬉しかったよ」

「比企谷さん…えへへっ」

智花の悩みを解決した所で、俺達は昼食を取り始めた。

「はっちゃん!私のおにぎりあげる!!」

そう言って差し出してきた真帆のおにぎりを見る、恐らく手作りなのだろう。

真帆は嬉しそうにこちらを見てくる。

「あ、ずるい!ひなもあげるー!」

と今度はひなたちゃんの出てきたおにぎりを見る。いやこれ、明らかに砲弾サイズだよね??雪だるまつくーろー的なの勢いでおにぎり作ったね??でも可愛いしえらいね、ひなたちゃんっ



「あ、あの … 私のもどうぞ!!」

そう言つて智花と愛莉が同時に差し出してきたおにぎりは、通常サイズと極端に小さいおにぎりが一つ。

「あ、お … おう … 全部食うの、俺が?」

「当たり前じゃん! はい、はっちゃんあーん?」

ここから先の記憶は俺には残されていない。残っていたのは、JSにおにぎりの過剰摂取で窒息させられそうになつた事だつた。

昼食の後、俺達は美星先生に誘われたレクリエーションに参加することにした。

レクリエーションは森の中にいる先生達から出される問題に答えながらキャンプ場に戻つてくるという、ハイキング形式な物だつた。

「よ … し! 皆、頑張つて一番を目指して行くぞ …!」

一番にゴールしたチームにはアイスクリームが支給されるという事で真帆は一気に気合を見せている、あ … まじ無邪気で可愛い嫁にしてえ俺を養つてくれ。

「お … おにいちちゃんといっしょにがんばるぞ …!」

「頑張ろうね? ひなちゃん?」

「ふふ、山の中を歩くのは体力アップにも繋がるしこれは悪い話じゃないわね?」

「八幡さん、頑張りましたよ!」

「おう、一位目指すかつ」

「よし！皆、えんじん組むぞー！」

俺を含む女バスメンパーは円陣を組み

「チームRO—KYU—BU！、行くぞー！！」

「「おう！！」」

乗せられてやったけど…待って俺めっちゃ恥ずかしい。

「ろりいちゃん…」

ちよつと小町ちゃん、後ろで眩いても聞こえてるからね。

ごみいちゃんに変わる新たな称号を得た俺達はそのまま山の中を進み、レクリエー

ションを始めるのだった。

\*\*\*\*\*

（「全く、姉ちゃん大人の癖に人の事を傷つけちゃいけませんって簡単な事も分かんない

のかよ！ほんつとムカつく！はっちゃん、こんなババアほつといて行こう！！」

「… はあ」

「ゆきのん、大丈夫?？」

「あ、由比ヶ浜さん…大丈夫よ、心配かけて悪かったわね」

私、雪ノ下雪乃の頭の中は今朝彼女に言われた台詞が何度も頭の中を巡っていた。

そう、確かに比企谷君は怒らず受け入れ返してくれる。…私は満足でも、彼の親しい人が見ていれば気持ちの良いものではない。…と云うか本人も気持ちのいいものではない、そんな事は分かっていた、重々と。

「…あんな子供に言われるまで、自分で気付けないとはね」

私は、己の驕りに酷く落胆した。

\*\*\*\*\*

「んんーアイス美味しい!!」

俺達は無事、一番でゴールしてアイスにあり着いていた。

「おー、勝利のあとのあいすはかくべつっ」

「ふふ、ひなたちゃんは難しい言葉良く知ってるな??」

やべえ、この天使本当可愛い。もう何やっても許せるわ、つかなんなんだよおー

って、やめろよ俺の中の何かがフィーバーするだろうがっ。

「おー、おにいちちゃんにほめられたくていろいろべんきようしましたっ」

「まじか、凄いなー ひなたちゃんはっ」

俺は恐らく気持ち悪い笑みを浮かべながら天使の頭を撫でていた。

「よう、比企谷コーチ?楽しんでやってるねえー??」

「み、美星せんしえい!」

「おいおい、あんまり変な声出すなよ…私が怖いみたいだろ」

「す、すみません…」

いやタイミング的にそう思うでしょうが …

「あ、お前達。暫く比企谷コーチを借りてくからそこで待つてろよ — ？」

そう言う美星先生に連れられ、物陰に移動するとそこには平塚先生がいた。

「さっきの件、悪かったな。完全に私の監督ミスだ。」

「さっきの…ああ、葉山の件ですか」

「ああ、あそこには使用関係者がいるから近付くなど伝え忘れていてな…あの子達の練習を邪魔するような真似をしてすまなかった」

「いえ、構いませんよ。正直そういう流れになるような気構えをしてなかった訳では無いですし」

「そうか…美星も悪かったな」

「んにや？私の監督不行き届きでもあるしそこはお互い様よ、一応証拠映像は撮らしてもらってるから…何かあった時は出さざる負えなくなるが」

「ああ、そういう事が無いようにこつちでも見張っておくよ、葉山にきつく言えば大丈夫だろうから」

「それでだ、比企谷。先程のお詫びという訳では無いが…」

\*\*\*\*\*

「えへへ、おりや——！」

「きやつ!?もう——やったわね真帆!!」

俺の目の前で、水着の幼女達が戯れている……いやいや、どうしてこうなった!?

というのも、葉山達の乱入で気分を悪くしただろうからという先生達の計らいで俺達は近くの川辺で遊ぶ許可を貰ったのだ。

だから決して、俺がJSの水着姿を覗き見るロリいちちゃんではない事を弁明しておく。

「お——みずがきもちいいっ」

「ふふ、気持ちいいね?ひなたっ」

「あ、あの……八幡さん」

そんな女バスマンバーが遊ぶ中、見守る俺の隣に愛莉が腰掛けてきた。

「ん??愛莉は遊ばないのか??」

「あ、いや……私泳げなくて」

「ふ——ん……でも、あの深さなら足も余裕で着くし大丈夫じゃないか??」

「あ、いや …… その …… 実は小さい頃、船に乗ってたら池に落ちちゃって …… そこから水辺が怖いんですっ」

「ほう …… そりゃ、確かに怖いな ……」

「でも、乗り越えないと今度の授業で皆の足を引つ張っちゃおうし ……」

「 …… 愛莉、俺は女バスのコーチだが別にバスケ以外にも教えられるぞ?」

「ツ!!」

言いたい事を先に言ってくれた事への感謝か、愛莉は笑顔で

「なら時間が空いている時にでも教えて下さいね、比企谷さんっ!」

嬉しそうにそう答えた。

「やっぱり、比企谷さんは愛莉推しなのかしら…」

「はっちゃん! やっぱりほんめいはもっかんじゃなくてあいりーなんだな!」

おいお馬鹿2人、折角のムードを壊すんじゃないよ!!

「おー、これがよにいうしゆらばですなー」

ひなたちゃん、声が可愛いけど生々しいからやめようね?」

「かつ、勝手な事言わないでよ真帆!?! そ…そんなの関係ないもおん!!」

下らない言い合いをしていると、押搦られた本人は感情爆発させ皆に大量の水を被せていきました。

… その際に智花の水着が外れて大惨事になった事は、胸のうちにしまっておこう。  
「大丈夫か、愛莉？」

「は …… はい、服はびしょびしょですけど …… 中に一応水着は着てるのでっ」

俺と愛莉は、大惨事後、遊ばないならジュースを買ってこいというまほまほ殿下の名を受け自販機まで足を進めていた

「そ、そうか…」

しかし透けたシャツから覗かせる愛莉の水着が何とも厭らしく、本当に小学生かと疑いたくなるものがあるな ……

「あ、あまり見ないで貰って良いですか …… ? 恥ずかしいので…」

「す、すまんっ」

俺は頬を赤く染めながら急いで顔を逸らす。その時物陰からこちらを覗き見て居た物には気づかず ……

「成程 …… ヒツキーああいう子が好みなんだ…ライバル出現かなあ、これは」

## 第8ゲーム～先制攻撃～

「さて、いよいよ晩飯だな…まあキャンプと言えばこれか」

プールでの一悶着の後、俺達はキャンプ恒例のカレー作り作業へと入っていた。

「んじゃ、私と紗季とひなが食材担当でもつかんとアイリーンがお米炊き担当ってかんじだな？」

「そうね、それで行きましょう。智花、そっちは任せたわね」

「うん、任せて！」

「そんなじゃ、俺は米炊き手伝うか。こういう場所で火を扱うんなら流石に大変だし」

「「え？」」

いや、待て待て。そりや大人が危ない方を手伝うのは当然だろ？あ待ってひなたちゃんそんな顔しないで、後で八幡コーチがうざい位に構って上げるから。

「むむ…智花と愛莉とダブル火起こしデートなんて…一体何処に火をつけるかしら、比企谷さんってば」

おい紗季、お前はやたらと俺を小学生とカップリングさせたがるな。

「ヒツキー！あの…さ、私も手伝っていいかな？」



不意に声を掛けられ、振り返った先には少し困り顔をした由比ヶ浜の姿があった。

「あのね、朝はその…ごめんさい、私が止めてあげなくて…」

「なんでぼいんのねーちゃんが謝んだよ？もう別に気にしてないから、手伝ってくれんならかんげいだ！」

この辺りの真帆の切替には本当に助けられる…恐らく、チーム全体のムードメーカーである真帆の決定は皆の背を後押ししてくれる。プレーで引つ張る智花と雰囲気で纏める真帆。こういう選手がいるチームは必然的に強くなる。

「そうね…折角だし、比企谷さんの学校での話も聞きたいので私も構いませんよ？」

「おー、ひなももんくはないー」

「えへへ、有難うね？えつと…真帆ちゃんに紗季ちゃんに、ひなたちゃん！」

「おい、雪ノ下の方は大丈夫なのか？」

俺はこつそりと由比ヶ浜に耳打ちする。

「それなら問題無いよ、さつきクラスで1人だった子に料理教えてるし」

「いや何その個人レッスン…雪ノ下の個人レッスンに小学生が耐えられんのかよ」

「今朝の出来事後だし…多分？」

あはは、と由比ヶ浜は苦笑いを浮かべて答え、そして俺達は分かれて作業を開始した。

その時、何故だか背中に刺さる由比ヶ浜の視線が危うい物だと云う事には、今の俺が

気付く由も無かった。

「んっ…：しよ、ん…：しよ」

ぱたぱたと飯盒の下を扇ぐ愛莉の姿を俺は見守っているのだが…何故だろう、駄目だとは分かかっていても男の性が目線に厭らしきを含ませる。

何故なら団扇を扇ぐ度に愛莉の早熟に実った果実が揺れ、滴る汗はその果実へと降り注ぐ…こんな甘美な光景が目の前に広がって居ては流石に凝視する他無い！

と、かなりの危険思考に毒されそうになっていた所で智花に声を掛けられた。

「あの、八幡さん。その…八幡さんって、甘い物とかお好きですか？」

「ん？ああ、かなり好きだぞ。好きなドリンクはMAXコーヒーと言ってしまうまでであるしな」

「そ、そうなんですわね！良かった…」

「どうかしたのか？」

「あ、いえ！ふふ…何でも有りません」

ぼそり、と楽しみにして下さいねと呟いた言葉を俺は敢えて聞こえない振りをした。

「ねえねえ、ゆいゆいははっちゃんのこと好きなの？」

「ゆ、ゆいゆいって私だよね？ってはあ!?何でそうなるし!？」

「あ、違うの？じゃあ良かった…私はてつきりアイリーンともつかんの間に新たな敵が現れるのかと思つたよー」

「そうね、おっぱいは愛莉にもあるとは言え…年の差のハンデは大きいわ」

「おー？ あいにねんれいはかんけいない、かべはこわしてすすむのがしんねんですつ」

「この子何で私よりしつかりした信念持つてるのかな!?でも、へえ…やつぱりヒツキーは…歳下好みなんだ」

「あ、ゆいゆいはそこで野菜あらつてればいいぞ？はっちゃんがゆいゆいには包丁もたせんなつていつてたし」

「事前忠告されてたんだね！」

「さて、そろそろいい頃合かな」

そう呟き、飯盒の中を開けようと手を伸ばす。

「あつツ」

俺は暑さに思わず手を飛びのかせてしまった、すると

「ひ、比企谷さん!?大丈夫ですか!?火傷なら急いで手当てを…きやつ！」

「危ねえ！」

「ツ…いてて、大丈夫か？あい…り…」

「はい、だいじよ…ツ…ツ」

俺を心配して躓いた愛莉を抱き留めようと必死に動いた結果、俺は大勢のJSの前で愛莉の上に馬乗りになりあるう事か果実を手の中へ収めるといふJa p a n e s e 伝統のらつきい☆すけべ状態へと陥っていた。

「ご、ごめんなさいッ…」

「あ、いや愛莉！悪い!？」

今にも恥じらいと申し訳なさと泣き出しそんな愛莉を顔を見て、我に返った俺は急いで飛び退こうとするも

「公衆の面前で自分の教え子を食ろうとするなんて…比企谷コーチ、遺言なら聞いてやるぞ?」

あ、俺オワツタワ

その後、夕焼けが落ちそうな森の中で男性の叫び声が聞こえたとか何とか…。

「まじ酷い目にあつたわ…」

「大丈夫ですか？八幡さん…」

智花は心配そうに俺の怪我の手当をしてくれていた。

いやもう、パンチ一撃で奥歯欠けるとかあれは化物の類ですよ、ええ。

「いや、俺が愛莉に悪い事したしな…」

「しっかし、はっちんもやるよなあ？ 皆の前でアイリーンのおっぱい驚掴みで押し倒すとか、まじすげえ！」

「…ヒツキー最低」

「今回ばかりは真面目に不可抗力だ…つたく、お陰で美星先生から熱血パンチの指導が入ったし…」

「ごめんなさい…私のせいで比企谷さんが…」

「愛莉は気にする事ねえよ、愛莉は俺の事気遣ってくれたんだろ？ 俺はその優しさだけで救われるよ」

そう言つて俺は、愛莉の髪を優しく撫でてやる。

お世辞でもなんでも無く、俺は愛莉の気持ち嬉しかったのだ。

「えへへ…あ、私少しお手洗いに行つてきますね？」

「あ、私も行く！」

「由比ヶ浜も愛莉も、早めに戻つてこいよ？」

「はい（はい）」

\*\*\*\*\*

えへへ、何だろう…比企谷さんに優しくされると、胸がドキドキしちゃう。真帆ちゃ

んや紗季ちゃんは何時も揶揄うけど…もしかしてこの気持ちは…

「ねえ、愛莉ちゃん。愛莉ちゃんって…もしかして、ヒツキーの事好き？」

「へ!? え、あ…いや、分かりません…私、男の人を好きになった事ないので…」

「そうなんだ…でもね、生半可な気持ちでヒツキーを好きになっちゃ駄目だよ」

「ふえ？」

「ヒツキーはね、私達奉仕部の大切な部員なんだ。けど最近は愛莉ちゃん達にバスケ教えてばかりで…余り部活する時間もないんだ。」

「あ…」

それは、申し訳ない思いだった。私達に時間を割くという事はそれだけ比企谷さんの時間を奪っている…という事に変わりはない。

「だから、別に貴女がヒツキーを好きになろうがどうなろうが良いけど…私達からヒツキーを取らないでね? ゆきのんもあんな言い方してるけど…本当に信頼してるし、今日の事は反省してたんだ。だから…余り私達に介入して来ないで」

「わ、私は別に！」

「バスケを教えてもらうのはいいよ、それは多分平塚先生の依頼だろうし…けど子供のくせに、恋愛にまででしゃばらないでって言うてるんだし！」

「わ、私はただ…比企谷さんに笑って貰えたら嬉しいだけで…」

「……だったら、それで留めて置いてね？それにヒツキーと貴女がもし付き合ったらどうなると思う？本当にロリコンって…ヒツキー、学校でいじめられるよ？」

「ッー」

学校で…いじめられる？私のせいで…？好きになったら…私のせいで比企谷さんに迷惑を？

「…なんてね、ごめんね？強く言い過ぎて…無いとは思うけど、ヒツキーを好きになるなんてさ！でもヒツキーを好きになるって事は、年の差だったり…色々考える事は考えないよね！子供の考え、押し付けちゃ駄目ってことだよ？」

「そう……ですね、私はコーチとしての比企谷さんが好きなのでですから」

「そっか …… それで安心したよ！じゃ、みんなの所へ戻ろっか？」

「…はいッ」

その日、笑顔の裏で少女は初めて抱いた純粋な気持ちで …… 殺した。